

九 切々道を求めて已まざれ

道を求むるは須らく眞劍でなくてはならぬ。求めたりされど得られずと云ふか。あゝ眞に求めたるか。汝は親鸞聖人の如く我心を推きしことあるか。善財童子の如く、之が爲に我身を捨てんとせしことあるか。慧可の如く之が爲に我が腕を断ちしことあるか。少くとも熊澤伯繼の如く、三日三夜師門に伏せしことあるか。或は又劉備の如く師廬を三顧せしことあるか。今日如何に世濁れりとて、求めて道の得られぬ譯なく、如何に人拙しとて、請うて師に會はれぬ筈はなからう。時降り世濁れりと雖も、此世は佛の世なり、佛心顯現の世界なり。我等親鸞聖人の如く師を求むるの時、必ずや法然上人は我等の前に來り給はん。我等、慧可の如く師を求むるの時、必ずや達磨大師は我前に再來せん。我等、伯繼たるの時藤樹出で、我等劉備たるの時孔明現はれん。求めよ、世間必ず應ずるものがあらう。叩けよ門は必ず開けん。打てよ響は必ず聞えん。かくても尙且つ、道を得る能はず師に會ふことが出来な
いならば、之を古の聖賢に求めよ、古今の書に求めよ。宇宙森羅の實相に求めよ。大千世界、いづれのものか孰れの人か、我を教へ我を導かぬことがあらう。而して靜に自己に省て、道心の有無に驚け。

昔は何卒道心を發したいものよと、本尊の前に額づきて、「我に道心を發させ給へ」と祈誓をかけしに、「其心即ち道心なり」との御告を蒙つたと云ふ。然り我は何故かくも道心が薄いのであらう。古の高僧傳や、妙好人傳は讀むさへに涙を催す人もあるに、あゝ我何故道を求むるに忠でないかと、耻づる心即ち是れ道心であると云つてよい。

大阪と關東と決戦したときであつた。徳川頼宣の家來で矢部虎之助といふ者があつた。力飽まで強く身材群を抜き勇猛の者であつたが、其の軍裝が又

物々しきものであつた。先づ長さ二間の指物を差し、三尺に餘る太刀を提げ
大位牌の立物に「咲く頃は花の敷にはあらねども、散るには漏れぬ矢部虎之
助」といふ一首の歌を書き記してあつた。この出で立ちを見たものどもは、
其の異様な風に驚き、さてもく見事なものよと云ひ囃した。然るに愈合
戦となつてからは、虎之助の装束が餘り重いので馬が疾く進まず、動もすれ
ば諸人より後れ勝ちで、兎角軍功がなかつた。それで人々から、「虎之助は鬼
面、人を嚇すもので御座る、装束のみ大袈裟で働きは一向に御座らぬ」と、
評判立てられるに至り、虎之助無念やる方なく遂に自刃してしまつた。
餘りに道具立の太く多く、虚名にかられては何事も得られず、實を失ふこ
とになる。求道の事も餘り道具立の大袈裟なのは感心せぬ。褪め易く變り易
いからである。如來の本願には赤裸々になつて進まねばならぬ。雑毒の善、
虚假の行、皆悉く打ち捨て、本願の大道に慕進し、二尊の仰せに信順す
べきである。